大田南畝

一話一言 3

（巻十七～巻二十四）

別巻 3

日本随筆大成

吉川弘文館

日本随筆大成　別巻
昭和三年四月十日発行
編纂者　日本随筆大成編輯部
代表　早川純三郎
発行者　桜井庄吉
発行所　日本随筆大成刊行会

日本随筆大成　別巻
一話一言 3
昭和五十三年十月　十六　日　印刷
昭和五十三年十月三十一日　発行
編　者　日本随筆大成編輯部
発行者　吉川圭三
発行所　株式会社　吉川弘文館
〒113　東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三―九一五一〈代表〉
振替口座東京〇―二四四番
製　作　株式会社　たんちょう社

一話一言

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

○巻十七

姫路侯の家の旧記　一三
五福石　一五
食火雞　一五
広沢書　一六
車留の札　一七
衣食住の奢　一七
以上原巻二十五巻末に文化四年丁卯六月十四日より十一月廿一日に至るとあり
帰蔵抄　二四
古人花押　二五
剪髪　二六
天王寺炎上　二六
文徴明詩　二七
勃窣山人詩　二七
草菴紀遊詩　二七
南畝莠言　未成書　二八
祭礼の事　二八
しころ根葱　二八
宣風和歌　二八
古文書の偽　二八
宝暦名代百三十四人異名　三〇
詩轍抄　三一
疾病　三六
講習余筆抄　三七
系図調　三八
東江忌日　三九
瀬名貞雄忌日　三九
赤城祭礼通行道筋　三九
郢曲撰要目録　三九

江戸鑑分限帳　四〇
増補江戸鑑　四二
万葉集抄　四五
以上原巻二十六巻末に年月なし

○巻十八

水東竹枝詞卅首　六五
武徳大成記奥書　六六
琉球国事　六六
論　杖　六八
烏有園記　六九
由井正雪事　七〇
末次平蔵事　七二
以上原巻二十七巻末に文化三年丙寅六月朔装釘鶯谷とあり

方帙巻軸　九八
百因縁　九九
白賁墅　九九
坂上池院日記　一〇〇
続惺窩文集抄　一〇〇

時務策　五七
左伝隠元即位説　五八
北里歌　五九

宝永伊勢参宮事　七五
明智光秀事　七七
琉球聘使詩　七八
亀岡十勝詩　八〇
草亭詩　八二
むかし物語　八三

鉄力木　一〇四
撫摸同意　一〇四
諸仏生日　一〇四
黄克晦画　一〇五
釈書蒙求　一〇五

花甲重逢　一〇六

○巻十九

花時遍游　一〇七
小金井捷路　一〇九
古　碑　一一〇
正三位為重懐紙　一一〇
青木氏書画　一一〇
藪里痩男　一一一
山号寺号　一一一
青木氏書画重見　一一一
天王祭　一一五
定家鷹三百首抄　一一五
繡江熊斐伝　一一七
むし蕎麦の価　一一七
谷響集　空華集　一一八
対山集　一一九
古人愛物　一一九
随　園　一一九
梅花百詠　一一九
養川院　一一九
光　琳　一一九
御旗揚松の記　一二〇
銃　台　一二〇
列女伝　一二一
転女身経　一二一
中野郊行　一二一
初例抄　一二三
山和尚錦　一二三
米価の事　一二三
鳥　居　一二四
讃留霊記　一二五
惺窩文集抄　一二五
惺窩和歌集抄　一二三
箏曲組の事　一二六

以上原巻二十八 巻末に文化五年戊辰孟春初四日燈下より書はじむ六十翁杏花園、同季秋十九日のあしたに書おさむとあり

甲州山梨郡磬銘 一三七
鵜祭 一四二
篇（サヽラ）の事 一三七
姫路侯明（ミン）楽 一四三
太平棒 一三八
八宮御文 一四三
中山王封王使ニ付薩州銅買請之事 一三八
けそう文 一四四
大岡出雲守 一三九
大垣侍従追悼短歌 一四四
田沼主殿頭 一四〇
小菅稲荷書付 一四五
渡唐天神賛 一四一
六位大酒官樽次考 一四六
小春候 一四二

○巻二十

観中山国聘使入覲歌并序 一四九
弁天町絵馬相撲人名 一六一
三島先生寿筵記 一五〇
辰巳屋惣兵衛伝 一六四
筱応道文 一五一
西川権清左衛門話 一六六
上田翁和歌 一五一
青木氏所蔵書画目 一六七
享保八卯年五月日記抄 一五三
青木氏所蔵書画目第二 一八〇
山崎橋興廃 一五四
葛飾郡の事 一八四
玉藻前考 一五六
鎌倉松が岡東慶寺の事 一八五
当時囲碁名人名 一五八

以上原巻二十九巻末に文化六年己巳孟夏念四以古紙装釘以為巻廿九遠桜主人とあり

四月十七日御神燈　一八六
親鸞上人　一八八
大草氏古文書　一八八
日本国人数　一八九
柴屋宗長　一九一
日観要考　一九一
日暮里和歌　一九二
浅井ともまさ著書　一九二
牛込舟河原古瓦　一九三
渡唐芭蕉像　一九四
一節切　一九四
唐館寿単　一九四
白山玉吉明神　一九五
自休翁の事　一九六
忍性祈異国　一九七
日蓮大菩薩記　一九七
全浙兵制　一九八
霖雨集抄　一九八

○巻二十一

元政法師与熊沢氏交　二〇三
仙波北院　二〇三
祠廟鬻買区　二〇三
武州普済寺石幢　二〇四
武侯廟碑　二〇四
根津随身　二〇四
おあちやの局墓　二〇五
上野佐久間石燈籠　二〇五
弘賢和歌　二〇六
心越禅師　二〇六
養川画執政四君書　二〇七
竹堂元日詩并序　二〇八
琵琶二条　二〇八
禁裏御遊　二〇九

重刻祖師御書序　二一〇
深見要言自序　二一一
王世吉詩　二一二
煙草盆古器　二一二
日南窪　二一三
李笠翁詩聯　二一三
駒掛堂　二一三
茶　膏　二一四
煎　汁　二一五
文　筆　二一五
寺川郷談　二一五
以上原巻三十巻末に文化己巳夏五月より起り冬十二月廿八日朝にいたるとあり　二一四
姫路城築立由来　二一五
井伊掃部頭教諭榊原刑部大輔詞　二一七
摂州白雉　二一八
烈婦仮名略頌　二一八
打　毬　二一二
丸橋忠弥被捕事　二一二
石井源蔵届書　二一四
渭南集抄　二一六
普済寺石幢の事　二一六
勝頼滅亡記　二一六
芝山家和文　二一七
競奇遺聞　二一七
荒政輯要　二一八
錦城詩　二一八
修性院開基の事　二一八
武備和訓抄　二一九
矢鏃図鑑　二一二
宅　地　二一二
前原伊助杉本九一右衛門欠落書付　二一四
牧野一学届　二一六
堀部弥兵衛書付　二一六
吉良佐兵衛御預の事　二一七
義士切腹被仰付候事　二一七
義士の子供の事　二一七
東厓(涯)義士行　二一八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

品川の大門　二三九
六樹園和文　二三九
本朝武家根元抄　二三九
袋翁和歌　二四一
成島道筑和歌　二四二
谷中日暮里修性院石表　二四三
殿艶幽趣　二四三
六郷稲毛古文書　二四三

○巻二十二

渭南文集蔵書印　二四五
カラフトの事　二四五
はせおくら　二四五
隠岐国造　駅路鈴　二四八
豊楽亭記　二五〇
生島新五郎島にてつくれるうた　二五一
沢庵和尚和文　二五一
以上原巻三十一　巻末に右一話一言文化七年庚午正月初四令児假装釘蔵于文庫六十二翁覃とあり
法問和解　二五四
官品正従の事　二六九
大高源吾忠雄書　二五六
篠弼詩　二七五
横川勘平宗利書状　二六〇
碁打の花見　二七六
寺坂吉右衛門書状　二六四
弓馬の事六条　二七九
堀部安兵衛書状　二六五
兵談二条　二八一
田村右京太夫書状　二六五
里見重代の太刀　二八一
大石内蔵助書状　二六六
学善坊吹貝　二八一
萱野三平書状弐通　二六七
江戸より蝦夷地宿村留　二八一

松前奉行支配役人名　二九〇

○巻二十三

歌仙　北平　二九五
亀屋文宝書通　二九七
以上原巻三十二巻末に文化庚午三月使児叔装釘杏花園とあり
帳中香抄　三〇一
早器居士伝　三〇六
余崧画　三〇九
楊誠斎集　三〇九
木香花　三〇九
鴨跖草　三一〇
法興年号　三一〇
東医宝鑑有治狐術　三一〇
コヲルド　三一一
三　七　三一一
洎夫藍　三一一
楼　葱　三一三
方　竹　三一三
上田余斎手書　二九八
古今取箇の大概　二九九
キヨルコ　三一三
人　事　三一三
陶　詩　三一三
道本禅師帰化　三一四
寛文中大坂御天守雷火御注進状　三一四
池田氏随筆　三一五
南掌国毎十四年例貢象　三一六
対軸孤軸　三一六
古人題画書于引首　三一七
星　谷　三一七
本浄寺　三一七
疥湿瘡　三一七
柿　蕃　三一八

黒田奥女中書翰写　三一八
美濃部伊織伝并妻留武始末書付　三一九
看　品　三二三
正燈寺墓　三二四
浅草専当やしき碑　三二四
芝青松寺古墓　三二五
河口三八　三二五
勾股全書　三二五
笠　沢　三二五
以上原巻三十四巻末に文化七年庚午羊日雪中起筆七月中元前夕書了杏花園とあり
王子田楽　三二三
馬経牛経　三二四
慈悲心鳥　三二五
小倉色紙　三二六
嵯峨開帳　三二七
春台糶賤行詩　三二〇
関ヶ原御膳仕立場　三二〇
柳沢吉保詩　三二一
蒲室集　三二一
春杪四月朔日　三二一
浅草三社考　三二四
加藤清正弐百年忌　三二六

○巻二十四

八股文　三二七
転切支丹類族　三二七
定家卿小色紙　三二八
北村季吟墓　三二九
護国寺五社　三三〇
赤城義臣伝抄　三三〇
小石川御殿番　三三八
青山仙寿院　三三八
普救類方　三三八
訴人衆番入　三三九

駿府四足門　三四九
新番組頭御褒美　三五〇
常行堂　三五〇
沢庵やしき　三五〇
杏葉考　三五一
本郷昌清寺　称仰院　三五一
松平信綱川越野間畠の事　三五一
田中丘隅酒勾川の事　三五三
家紋　三五四
板坂意斎　三五四
義光　三五五
結城陣年月　三五五
石川丈山　三五五
津金氏古文書　三五七
和襪子　三五七
一色内蔵助害伊丹播州　三五八
たば川水道　三五八
一里塚　三五八
司天台　三五八
勝次郎兵衛正成　三五九
信州ソ民将来　三五九
名香　三五九
利休居士賛　三六〇
忍岡南塾乗抄　三六一
松平七人衆　三六五
金銀銭年月　三七三
星合伊左衛門　三七四
京極兵部高門　三七五
下総国郡の事　三七五
伴野十左衛門　三七五
手網笠　三七五
武家諸家系図二条　三七五
飛鳥山知行所　三七六
金森氏書上　三七六
鄰交提醒抄　三七六

以上原巻三十五巻末に文化七年庚午八朔より書はじむ同八年辛未孟春十一日に書おさむ遠桜山人とあり

増訂 一話一言　巻十七

大田南畝先生纂著
大田　堅
島崎栄貞　同校

○姫路侯の家の旧記

一寛文十一年辛亥　姫路侯の家の旧記也。

年中覚書

三月廿六日四ツ前御登城被成、御城より直に御老中御同道被遊候而豊後様へ御見廻被成、九ツ半前御帰被遊候。

一廿七日四ツ御登城被成、同半過御老中御同道にて表御門より御帰、大書院へ御通、松平陸奥守殿家来出入之儀御穿鑿被遊候、則伊達安芸、柴田外記、原田甲斐、古内志摩、蜂屋六左衛門伺公仕る、替々御前罷出委細之儀申上る、其後御客の間へ何も罷出、其座にて喧嘩仕出し、原田甲斐、伊達安芸を二太刀にて打留、其より御広間奥の間へ切出る。柴田外記右の面一ヶ所、同肩二ヶ所、うでに一ヶ所、蜂屋六左衛門右のうしろに一ヶ所、左りの肩一ヶ所、左り之手甲一ヶ所、原田甲斐頭三ヶ所、あご二ヶ所、首に二ヶ所、むね二ヶ所、うでかけて後に二ヶ所、もゝに一ヶ所、甲斐儀は働御老中様御前へも可罷出様子相見申に付、太田伊兵衛袖下はらい切、石田弥右衛門頭に一ヶ所手負申候、秋野六郎左衛門、川田金左衛門、野

尻甚五兵衛、高須善太夫、井田茂左衛門討留る。古内志摩は手も負不申候、伊達安芸、原田甲斐死骸夜の四ッ半過に、上田五太夫、出淵新左衛門、大塩定右衛門、源五左衛門、安太夫立合、右之家来共穿鑿仕相渡す。

一柴田外記、蜂屋六左衛門儀、九ッ時分御相談の上にて被遣、何も東御門より出る、御門外迄関善之丞、岡忠右衛門罷出、此方よりは御足軽も付不参候。

一表御門に日暮両くゞり御門明御帳付両方に罷出る、御奏者番両方へ出る、御門外に大挑灯御紋付両に内御門脇に二ッ、御帳付そばぼんぼり一ッ宛、

一東御門に大挑灯一ッ、御台所前同断、式台口に同断、内玄関同断、

一古内志摩九ッ時分表御門より罷出る。

一三月廿七日手負為療治福山道庵、杉本忠恵来弟子参候、藤本藤伝同道、薬参療治仕候、内薬田中隆玄人参之儀宇野久太夫御前申上候処則被下置候、独参湯手負共に用る、宮下玄祝、其外大塚玄察、並木領庵、土屋立庵、安藤宗仙罷出る。

一廿八日五ッ過御登城被成、九ッ過御下り被遊候。

一廿九日四ッ御登城、直御老中御同道にて、稲葉美濃殿日光へ御越被成候付而御暇乞被成御座、九半過に御帰被遊候。

一同日毎朝御客に御逢被遊候時分、御広間奥の床間別に二人、西のゑんがわに二人、右は御供番より四人可罷出旨被仰出候。

奉　伝右衛門

一同日毎朝御客御会被遊候節、宇野久大夫、石川四郎右衛門、関助之丞儀、御対面間の次に相詰可申旨被

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com